

# 幼年体育プロジェクト

塩田桃子(大阪成蹊短期大学)

## はじめに

今回、幼年体育プロジェクトの足跡を執筆するにあたり、本プロジェクトの礎を築かれた田村布枝先生と竹内進先生に聞き取りさせていただきわかったこと、そして、私が同志会と出会った2004年以降を中心にまとめてみたいと思います。

## 1. 幼年体育プロジェクトの誕生

(1)幼年体育プロジェクトが誕生するまで

「大阪の幼年」の実践者代表と言えば、田村布枝先生と飛田茂先生です。保育の実践者として全国の幼年体育分科会を牽引されてこられました。このお二人は、大阪の保育運動にも深く関わり大阪の民主園をはじめ、多くの園の「運動あそびの指導」に影響を与えてこられました。当時、右も左もわからない私は、お二人の実践されてきたお話を聞いて、「なんでそんな面白い発想がわくんだろう?」と思っていた記憶が蘇ります。「氷おには、本物の氷を持って追いかける方が子どもは楽しんで逃げるよ」、「ボールを投げる環境がなくても、散歩先で、雑草を引っこ抜いて、土の重みを利用して投げることも、同じ『投げる』や」、「フラッグフットボールをする時に、ボールを大切に持って逃げることを教えたいなら、ボールをスイカにして持って逃げたら面白そうやなあ」等々、想像を絶する発想が次から次へ溢れ出てくることに驚き、私自身が固定概念に囚われていることを自覚させられたことが思い出されます。

(2)幼年体育プロジェクト誕生

大阪の幼年体育プロジェクトを立ち上げる前は、プロジェクトとしては存在しなかったものの、先に述べたお二人以外にも、大村さん、黒井さんが深くかかわりを持たれて研究

されていたと聞いています。このような背景の中、今からおおよそ20年ほど前に、竹内進先生が大阪千代田短期大学(以下、「千代田」)に移られたことがきっかけで、大阪に幼年体育プロジェクトが発足されました。当時のメンバーは、千代田の卒業生以外は、田村先生と私だけでした。身近な素材を使ったおもちゃや木のおもちゃの制作、運動あそびの実技、指導案の作成等が行われ、私も学生の立場で竹内先生の授業を受けているようなそんな例会でした。その後、私も保育現場に出かけることが増え、吉岡さんや西井さんらとの出会いから、千代田以外のメンバーが仲間となって参加されるようになりました。

## 2. 幼年体育プロジェクトを代表する実践

竹内先生は、教え子の卒後の支援をしながら、運動あそびの実践も精力的に行われており、私もそれに触発されながら、保育現場の先生方と協働しながら実践に携わるようになりました。その中で竹内先生、田村先生私が協働で実践したのが、吉岡先生(おおぞら保育園)の5歳児のボール実践です。吉岡実践が生まれる前に、そのクラスの子どもたちを対象に「投能力と運動指導との関係」を明らかにするための研究を行いました。ここでは、ボール以外のものを使った「投げる」あそび(メンコや紙飛行機等)を行うことで、投能力が向上することが明らかになりました。その研究を終えた後、実際にボールを使ったさまざまな投げるあそびからシュートボールに繋がるあそびへと発展させていったのが吉岡実践です。その実践では、最終的には3対1のシュートボールまで行いましたが、パスが行われる場面も見られるようになりました。しかし、それはほんの一部の子どもたちだけであり、「幼児期にボールパスは可能か」という議論がありました。幼児期の子どもたちは、動いているボールの落下地点を予測し、キャッチすることが非常に難しいのではないか等の疑

間から、キャッチを楽しむことができるあそびである「ドーナツボール」実践が誕生したり、井上先生が吉岡実践の追実践を行う等、ボールあそびに着目した実践が盛んに行われました。これらの実践は、ルールのあるあそびを楽しむことができる5歳児らしい姿が見られたことと、また、子どもたちが楽しんで参加するためにごっこあそびを取り入れられていたことが特徴的でした。幼児期の子どもにとって、ごっこあそびは欠かせないあそびであり、運動あそびにおいても必要な要素であることがわかってきました。また、「キャッチを楽しめるか問題」は、ドーナツボール実践によって、幼児期の子どもでも、柔らかくて比較的ゆっくりな動きであるボールであれば、繰り返しあそぶ中でキャッチが可能となり、十分に楽しむことができる教材であることがわかり、何を教えたいのかということから教材をつくっていくことの重要性を教えてもらうことができました。

吉岡実践後、少しずつ実践が生まれるようになっていきました。この10年の間、幼年で一番、報告の多い実践は何とんでも荒馬です。これはやはりダンプ園長こと、高田敏幸先生の影響が大きいです。ダンプ園長は、私たち幼年体育プロジェクトに、「本気こいて(本気になって)あそぶ(踊る)」大切さを熱く熱く荒馬で教えてくれました。また、「共振するからだ」の重要性が強調されました。これは、単に「できる」ことだけを求めるのではなく、仲間と一緒に教え合ったり感じ合ったり響き合う仲間との関係性が重視されました。このことを私たち自身が幼年メンバーで荒馬を踊ることを通して体感し、仲間と共感しながら学んでいったように思います。この学びによって、本プロジェクトそのものが集団として高まっていったように思います。そして、この学びが自信となり、次々と荒馬実践が行われるようになっていきました。

先月の例会(2021年3月)では、荒馬の実践

が3本も報告されました。そこでは、「幼児期に型がある民舞を教えることが発達に合っているのか」ということがテーマとなり、幼児期の子どもたちに荒馬をどのように教えるのか、ということが課題として挙げられています。

### 3. 幼年体育プロジェクトのこれから

幼年プロジェクトが誕生してから約20年間を振り返る中で、立ち上げ当初、実践がない中で竹内先生が、「なんでもいいから、短時間でいいから実践をして報告しよう!」と呼びかけ続けていた頃から、今となれば、実践報告をしたいと手を挙げる人が多く、一度の例会で3名の報告が行われるまでに至りました。これは、保育士不足・待機児童問題等厳しい保育情勢の中でも、「子どもにとって」「大切なこと」を伝えていきたい、「子どもの願いを叶えたい」という保育者の熱い思いがあるからだと思うのです。また、新型コロナウイルス感染拡大防止策によって、保育は大きく変えざるを得ない状況になりました。手をつないだり、友だちとじゃれ合ったりする等、当たり前前にできていたことができなくなってしまいました。改めて「運動の大切さ」を実感している今だからこそ、「これだけはゆずれない幼児期の運動で大切にしたいことは何か」を今後もみんなで議論し、共有していきたいと思えます。

